

やまと 民俗への招待

ふるくとくのまほら

鹿谷 熟

県内150の集落の民俗調査をし、その結果を項目ごとに、地図化した『奈良県民俗地図』(県教委刊1982)という報告書がある。信仰的な講習会の項目を見ると、盆地部を中心に、大峯山を信仰の対象とした行者講・山上講が広く分布していることが分かる。

寺院の境内や道端に役行者の石像や大峯山三十三度登山などと刻んだ石碑があるところは、こうした信仰や講があったとみていいだろう。石造行者像としては、秋篠寺の1546(天文15)年在銘のものが最も古く、法融寺(奈良市二名)の1

555(天文24)年像や

室内150の集落の民俗調査をし、その結果を項目ごとに、地図化した『奈良県民俗地図』(県教委刊1982)といいう報告書がある。信仰的な講習会の項目を見ると、盆地部を中心に、大峯山を信仰の対象とした行者講・山上講が広く分布していることが分かる。

寺院の境内や道端に役行者の石像や大峯山三十三度登山などと刻んだ石碑があるところは、こうした信仰や講があったとみていいだろう。石造行者像としては、秋篠寺の1546(天文15)年在銘のものが最も古く、法融寺(奈良市二名)の1

555(天文24)年像や

長弓寺(牛駒市上町)の室町後期のものなどが古例で、盆地西北部の講習会の結果の早さがうかがえる。

山上参りの習俗は、県内ばかりではなく、県外にも広がっている。かつて琵琶湖畔の大津市堅田を歩いてみると、野神社があり立派な社殿が設けられ、その背後に自然石を集めめた石組みがある。新田義貞の妻、勾当内侍の墓だとある。

ケツの中の泥を石に塗り始めた。あつけてとられていると、その一人西田源吉さんは、祭りの前に

始めて、九死に一生を得るような経験をしたといふ。若い頃の修行の山での出来事が、よほど強く心に残っているようだっ



長弓寺境内にある室町後期の役行者像(高さ約1m)。下方に前鬼と後鬼が浮き彫りされている。筆者撮影

と叫びながら走りまわる。

また、京都府田辺町(当時)大住の旧家で、古文書調査を手伝ったことがあった。大量の近世文書のなかに、小さな袋と同じ「大峯山上御参詣路用記」があった。1799(寛政11)年8月11日に出立して、15日に帰郷した時の算用帳で、旅程の詳細が分かる。當時の御札、黒小杓子、いおう木(現代のマツチ)、饅頭、菓子、しゃくなげ(石楠花)、だら助(陀羅尼助)が土産で、集落各戸に届けられたことも分かる。

盆地に広がる大峯講

表

(奈良民俗文化研究所代)